

極低出生体重児の合併症とその予後に関する研究

研究分担者 与田仁志(東邦大学新生児科)

研究要旨

日本で出生した極低出生体重児(VLBW)の長期予後を含めた出生前からのデータを集積しているNRN:neonatal research network データを用いて、極低出生体重児の合併症とその長期予後を追跡調査する。今回は、先天性心疾患を対象にその頻度および予後について調査した。先天性心疾患を合併した児は423例(0.9%)であった。在胎期間・出生体重の中央値はそれぞれ31週、1,127gであった。心疾患の内訳としては心室中隔欠損16%、ファロー四徴15%、大動脈縮窄・離断11%、肺動脈狭窄・閉鎖11%、両大血管右室起始10%、左心低形成6%、完全大血管転位5%、房室中隔欠損5%、総肺静脈還流異常3%であった。他臓器の先天異常合併が11%に認められた。また入院中の合併疾患として、脳室内出血が12%、脳室周囲白質軟化(嚢胞性)が2%、NEC・FIPが7%に認められた。38%の児がNICU入院中に何らかの手術を受けた。NICU入院中の死亡退院が98例(23%)に認められ、その約1/3が早期新生児死亡であった。在宅酸素での退院は10%に認められた。

研究協力者:

中尾厚 (日本赤十字社医療センター新生児科)

日根幸太郎 (東邦大学新生児科)

緒方公平 (東邦大学新生児科)

た症例を対象とした。

(倫理面の配慮)

本調査は、研究利用について同意がなされている小児慢性特定疾病登録データを用いて行われており、国立成育医療研究センター倫理審査委員会による倫理審査(受付番号:1637)による承認済である。

A. 研究目的

新生児医療の進歩とともに極低出生体重児の予後は改善している。しかし先天性心疾患を合併した極低出生体重児については単施設では経験が少ない。今回我々は、Neonatal research network(NRN)のデータベースを使用して、頻度と予後を主として検討した。

B. 研究方法

NRNデータベースに登録された2003年1月～2014年12月出生の極低出生体重児49614例の中で、「1412先天異常疾患名」に先天性心疾患が記載され

C. 研究結果

染色体異常を有しない極低出生体重児の中で、先天性心疾患を合併した児は423例(0.9%)であった。在胎期間・出生体重の中央値はそれぞれ31週、1,127gであり、SFDもしくはLFD児が約7割を占めた。心疾患の内訳としては心室中隔欠損16%、ファロー四徴15%、大動脈縮窄・離断11%、肺動脈狭窄・閉鎖11%、両大血管右室起始10%、左心低形成6%、完全大血管転位5%、房室中隔欠損5%、総肺静脈還流異常3%であった。他臓器の先天異常合併が

11%に認められた。また入院中の合併疾患として、脳室内出血が12%、脳室周囲白質軟化(嚢胞性)が2%、NEC・FIPが7%に認められた。38%の児がNICU入院中に何らかの手術を受けた。NICU入院中の死亡退院が98例(23%)に認められ、その約1/3が早期新生児死亡であった。在宅酸素での退院は10%に認められた。

D. 考察・結論

極低出生体重児の生存率が90%を超える日本においても、心疾患を合併していた児は約1/4がNICU入院中に死亡していた。週数・体重に比して脳室内出血や壊死性腸炎の発症頻度が高く、全身管理に細心の注意を払うべき対象と考える。

E. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

NRNデータベースにみる先天性心疾患合併極低出生体重児の頻度と予後
第52回日本周産期・新生児医学会 2016.7.16-18
富山

F. 知的財産権の出願・登録状況(予定を含む。)

1. 特許情報

無

2. 実用新案登録

無

3. その他

無